

浦上川の河川改修の歴史

長崎大学大学院工学研究科 フェロー○高橋和雄

1. まえがき

1982 年長崎豪雨災害から 30 年以上が経過して、甚大な被害を受けた長崎市内でも災害体験が風化しつつある。災害伝承をするために、長崎県防災基本条例の制定による長崎県防災月間(7 月)の関連行事の開催、災害のアーカイブの作成、災害遺構の掘り起し等がなされてきた。直轄河川とは異なって県管理の河川については河川の歴史等が知られていないことが、市民が川に関心を持てない一因となっていることが想定される。そこで、本報告では長崎市を流れる浦上川の河川改修の歴史をまとめた結果を報告する。

2. 浦上川の概要

浦上川は諫早市多良見町に近い長崎市畔別当付近の標高 336m の前岳にその源流を發し、国道 34 号バイパス沿いに西に流れ、三川川と大井手川と合流して、浦上地区の市街地に流入する。その後、城山川や下の川を合わせて、市街地を貫流して長崎港に注ぐ流域面積 38.6km²、延長 13.3km の二級河川である。長崎市街地を流れる河川としては、流域面積や流路延長とも大きく、縦断勾配も比較的緩やかな都市河川である。

3. 浦上川流域の歴史

長崎港の入り江が深く湾入していたので深江浦と呼ばれ、その浦の上にあるので、浦上という名称になったといわれている。浦上地区は有馬領になっていたが、1584(天正 12)年に有馬晴信がイエズス会の知行地として寄進した。伴天連追放令発布後の 1600(慶長 5)年に天領になり、さらに、1605(慶長 10)年に浦上諸村は天領と大村藩に分割され、浦上川流域は天領に含まれた。左岸側は浦上村山里、右岸側は浦上村淵とされた。

山里の高台に浦上街道が西坂町まで至っていた。深江浦は現在の浜口町まで入り込み、現在の JR 九州の浦上駅と長崎駅は海の中であった。浦上地区では農業と漁業で生計を立てていたが、当地区には平地が少なく、田畑は狭く生活は苦しかったようである。1889(明治 22)年に長崎市制が施行され、1898(明治 31)年に西彼杵郡浦上山里村の一部と浦上淵村が長崎市と合併し、1922(大正 10)年に残りの浦上山里村が長崎市と合併した¹⁾。

4. 浦上川の歴史

浦上川にかかわる歴史を長崎市史、長崎県議会史等によってまとめると、表-1 の結果となる。浦上川の名称がいつから使用されだしたかは不明である。江戸時代の水害の記録は御用留に散見されるが、川の名が確認できるのは、1860 年(万延元)年 5 月末の豪雨での浦上村淵の庄屋志賀による長崎代官所への被害届には大川から御用木や橋の木材が流れてきたとする記述がある。1886(明治 19)年の第 1 次長崎港湾改良事業による河川の土砂留工

表-1 浦上川の河川改修等の歴史

年	出来事
1730(享保 3)年	浦上新田の造成工事 (茂里町から浜口町まで)
1882(明治 15)年～	第 1 次長崎港湾改良事業
1889(明治 22)年	
1886(明治 19)年	長崎港維持のために、土砂留工事
1897(明治 30)年	長崎港維持のために、土砂留工事
1897(明治 30)年～	第 2 次長崎港湾改良事業(浦上新田から大黒町まで埋め立て)
1904(明治 37)年	
1922(大正 11)年～	浦上川流域で水害多発
1928(昭和 3)年	
1928(昭和 3)年～	浦上川第 1 期改修工事(長崎市事業主体)
1931(昭和 6)年	浦上川が準用河川に指定(二級河川、県管理に)
1932(昭和 7)年～	浦上川第 2 期改修工事(長崎県事業主体)
1934(昭和 9)年	
1982(昭和 57)年	1982 年長崎豪雨災害、激甚災害対策特別緊急事業と災害復旧助成事業による主として河道掘削、浦上ダムの緊急治水ダム事業
1991(昭和 63)年～	ふるさとの川モデル事業整備計画の河川に指定
2012(平成 14)年	長崎水害緊急ダム事業の浦上ダムの検証、継続に

キーワード：河川の歴史、河川改修、長崎大水害

連絡先：〒852-8521 長崎市文教町 1 番 14 号 長崎大学工学研究科 TEL 095-819-2880、FAX 095-819-2879

事では滑石川(現の大井手川、支川)の名前が使用されている。長崎港に土砂堆積が進み、港湾機能を維持するための工事の一環であった。

(1) 浦上下流域の埋め立て 浦上の地区の埋め立ては、1730(享保 15)年から始まった浦上新田の造成工事で、現在の浜口町から岩川町、銭座町辺りまで埋め立てられた。この新田は湿地で南端に近いところは、蓮畑であったといわれている。明治に入ると1897(明治 30)年から1904(明治 37)年にかけての第2次長崎港湾改良事業で浦上新田から大黒町まで埋め立てられ、現在の浦上川下流域の河川形状が確定した¹⁾。

(2) 水害頻発と河川改修 浦上地区の開墾が進み、市街化が進んでくると、浦上川流域で水害が表-2のように頻発しだした²⁾。特に、新しく埋め立てられた市街地での浸水被害が目立つ。1927(昭和 2)年の水害の被害額は約360万円に達し、1926年度の歳出決算額226万円の1.6倍に達した。長崎市議会史³⁾によれば長崎市議会は浦上川改修にかかわる5箇年継続事業計画を議決した。予算案は計41.5万円で、その年度の市の一般会計当初予算188万4,900円の22%に達した。長崎市費については長崎市土木公債が発行され、受益者の企業や個人から計5万3,488円(継続事業費の13%)の寄付がなされた。長崎市による浦上川の河川改修は、浦上川およびその支川の改修と堤防改築、平地の湛水防止工事および城山町地内の変流工事からなる。梁橋から大橋までの455m区間の川幅が22mから33mに拡幅された。

長崎市議会は、浦上川の改修事業の議決と同時に、長崎県知事に宛てた「浦上川を県支弁編入に関する意見書」を採択した。表-3のように長崎県議会⁴⁾でも「浦上川を準用河川に認定」の建議が提出された。長崎県も浦上川から長崎港に流入する土砂により水深が浅くなっていることを認識していたが、県議会での議論が深まらずに、この建議は審議中止で議長預かりとなった。1931(昭和 6)年に内務省から河川法を準用する河川として、県内16河川を認可し、その中に浦上川も含まれたが、県支弁による改修かどうかは未定であった。1932(昭和 7)年の臨時県議会で長崎県による浦上川改修費の議決がなされ、1932(昭和 7)年から1934(昭和 9)年の3年間の34万円の事業計画が認められた。長崎市による5ヵ年継続事業の最終年を引き継いでもので、浦上川の第2期改修工事に相当する。これらの河川改修によって、浦上川流域の水害は激減した。

5. 長崎豪雨災害

長崎豪雨によって浦上川流域も浸水被害を受け、浸水面積は195ha、床上浸水は2,241棟、床下浸水は1,393棟に及んだ。浸水の原因は、河積あるいは暗渠断面の不足、本川の水位上昇による排水不良、河道の屈曲、流出物による橋脚部の堰止めおよび上の地域からの浸入水であった。最大浸水深は国道206号沿いの浦上駅前で2.0mであった。河川災害の特徴として、河川の平面形状が直角にカーブしたところや蛇行が厳しい箇所が多く、このため護岸の崩壊が多い。災害復旧は、河道改修と浦上ダムの洪水調整機能を持つダムとしての改造で対応した。河道改修は、市街地のために河床掘削により対処するものとし、これで対処できない地区については一部拡幅した。河床掘削で、新たに石積み護岸の根元に根継工が施工された。下流の稲佐橋から大橋間の2.8kmを激甚災害対策特別緊急事業、大橋から三宝橋間と三川川を災害復旧助成事業で実施した。なお、この流域では洪水水位標が城栄町に、長崎大水害慰霊供養塔等が上流の昭和3丁目に設置されている。

6. まとめ

本研究では、浦上川の中下流域の改修の歴史を調べたが、さらに上流域の歴史を調査する予定でいる。本研究は長崎大学工学部の創成プロジェクトの一環として実施したもので、課題を提供された長崎県河川課橋口茂氏をはじめ、川に学ぶうかい in 浦上川(大橋地区)のメンバーの皆様にお世話になったことを付記する。

参考文献

- 1) 新長崎市史編さん委員会：新長崎市史 第一巻自然編等、pp.24-27、同第二巻近世編、pp.176-179、pp.292-304、同第三巻近代編、p.133、pp.231-237、同第四巻現代編、pp.11-12、ぎょうせい、2012.3-2014.3、
- 2) 長崎市役所：長崎市制50年史、pp.435-442、1939.11、3) 長崎市議会：長崎市議会史 記述編 第2巻、pp.707-749、1996.3、4) 長崎県議会史編纂委員会：長崎県議会史 第4巻、pp.222-223、pp.483-484、pp.728-729、pp.794-797、1967.3